

金正恩の公式化

— 44年ぶりの党代表者会開催

2010年9月28日、朝鮮労働党の代表者会が44年ぶりに、中央委員会総会が17年ぶりに開催され、翌日未明には金正日キムジョンイル総書記の三男といわれる金正恩キムジョンウン氏の名が入った党幹部名簿が公表された。

党代表者会の目的は「最高指導機関の選挙」と事前発表されており、さまざまな観測を喚起したが、結局のところ金正恩氏公式デビューの場となり、体制の強化が図られた。金正恩氏は、中央軍事委員会に新設された副委員長職に就き、事実上後継者としてお披露目されたことになる。現時点で北朝鮮の公式メディアが彼を「後継者」だと明言しているわけではないが、昨年から同国国内で

慶應義塾大学専任講師

磯崎 敦仁



は、金正恩氏が金正日総書記の「偉業」を受け継ぐ人物であるとの宣伝活動が展開されてきた。また同氏が就任したポストは、常識的には20代後半の若者が就けるものではない。公開された映像を見ても、明らかに一人だけ極端に若く、唯一、人民服を着用した金正恩氏が最前列にあり、特別な存在であることを内外に印象付けるのに十分なのであった。

これにより、金正日総書記の後継者は誰か、そもそも再び世襲なのか、という長年の論議にはとりあえず決着が付いたことになる。金正日総書記が還暦を迎えた2002年ころから長男・金正男キムジョンナム

氏、二男・金正哲氏キムジョンウ、さらにはその他の人物が後継する説や集団指導体制の可能性も含めて多様な「情報」が報じられてきた。一時、北朝鮮メディアの論調にも、後継者の存在を暗示していると読み取れるものがあったが、この問題はそれが公にされることによってこそ本来の意味を持つ。今回の金正恩氏の登場によって、北朝鮮の本質が長子重視の儒教伝統よりも、独裁にあることを再認識させられた。後継者の選定は最高指導者の専権事項だということである。

金正日流の前例踏襲

金正日総書記が公の場に登場してから30年間、ソ連・東欧社会主義体制の崩壊を経てその体制を護持してきたことを考えると、前回の後継者問題は北朝鮮にとって成功した前例だと言える。だからこそ、その経験は相当程度踏襲され、党機関紙『労働新聞』は、金正日氏が後継者に内定した「1970年代」と現在を対比する記事を昨年から

たびたび掲載してきた。もちろんのこと、前例の完全踏襲ではなく、今回は大きく二つの相違点が見られた。後継体制の整備が急ピッチで進展しているということと、「先軍政治」に沿って進められているということである。

昨年1月に韓国の聯合ニュースが「三男が後継者に内定した」と報じて以来、称揚歌「パルコム（足音）」の流布や金正恩氏をたたえるポスターの写真、異母兄・金正男氏とみられる人物の証言といった状況証拠が矢継ぎ早に出てきた。いずれも金正恩氏が後継者に内定したことを裏付ける決定的証拠とは言えなかったが、それを否定する材料も出てこなかったのが今回の特徴でもあった。

中央軍事委副委員長に就任した金正恩大將は、党代表者会当日に行われた記念撮影の後も、朝鮮人民軍第851軍部隊軍人の訓練視察（10月5日報道）、党創建65周年に際して開催された銀河水管弦楽団の「10月音楽会」観覧（10月6日報道）に続き、10月9日には中央報告大会への出席、同日夜にはマスゲーム「アリアン」で訪朝中の周永康・

中国共産党政治局常務委員とも対面するなど、動静報道が連日続いた。

これらの動きは、金正日書記（当時）がデビューした30年前の前例よりも急速に後継体制の整備が進んでいることを物語っている。金正日書記の場合は、後継者として内定してから6年ほどの準備期間を経て、1980年10月10日の第6回党大会で初めて公式報道にその名を現していた。それから長らく動静報道がなく、1981年5月30日に金日成主席の側近幹部だった沈昌完（シムチャクワン）氏の霊前を弔問した（5月29日）ことが報じられた後、妙香山地区（5月18日〜22日）を皮切りに、徐々に「実務指導」が開始された。同年中に李季（リケベク）白朝鮮総連副議長や在日朝鮮青年学生祝賀団等とも会見しているが、外国要人との会見はもっと後になってからのことである。前例をはるかに上回るスピードで金正恩氏が登場してきた背景には、2008年8月に悪化したとされる金正日総書記の健康状態があると考えられている。

時間軸に加え、いま一つの特徴は、金正日総書

記が十数年来掲げてきた「先軍政治」の色濃い影響である。折しも、8月25日は「先軍革命領導50周年」であるとして大規模行事が用意されていた。近年、北朝鮮では歴史の書き換えが進んでおり、金正日氏は弱冠18歳の時から軍を率いてきたと強調されてきた。中央軍事委員会は、昨年2月に金正日総書記が委員長に就任していることが判明したばかりの組織だが、金正恩氏が、軍を指導する立場にある同機関のナンバー2になったことで、「先軍政治」を継続していく意思が明確になったと言える。それは、金正日・金正恩体制が軍の完全掌握を引き続き最重要課題として捉えていることを意味する。「先軍政治」は、東欧革命が直接的な契機となって掲げられるようになったものである。1989年のチャウシェスク・ルーマニア大統領領処刑は、軍が指導者を裏切らないことこそ体制維持の絶対条件であるとの教訓を北朝鮮にもたらしていた。今後、後継体制整備に向けて、軍の歓心を買うために一時的であるにせよ強硬策をとる可能性は残されたままである。

つまり、今回の一連の動きは、金正恩体制の始まりではなく、あくまでも金正日体制下で、その權威を受け継いだ後継者が誰であるのかが公表されたにすぎないと言える。世襲である以上、「金日成民族」「金日成朝鮮」を従来以上に強調する教育・教化によって「正統性」確保が図られることになり、今回30年ぶりに改正された党規約序文でも、その傾向が明確に表れている。

一方、金正日体制は、経済状況を好転させる必要性についても強く認識している。だからこそ今年は「軽工業と農業に拍車をかけて人民生活で決定転換を成し遂げ」、「対外市場を拡大して対外貿易活動を積極的に展開」しなくてはならないとの方針を明示し、少なくとも表面的には民生重視の安定志向であった。後継体制をスムーズに整備していくためには、人々の歓心を買う必要性もある。

「人事の妙」

党代表者会の招集と同日開催された中央委員会

により、頂点の総書記と末端の党細胞を除いて事実上機能不全に陥っていた党組織の再生が図られた。党幹部のポストが埋まったことは、文民にとって昇任という大変なインセンティブになる。今回公表された人事については、金正恩氏の公式化以外にもいくつかの注目すべき点があった。

第一に、大将より格上の次帥称号が与えられた李英浩リヨンホ総参謀長の台頭である。金正恩氏とともに中央軍事委副委員長に就任したほか、常務委員のポストも得たのであった。一方、軍の重鎮である呉克烈オクニョル国防委副委員長は、中央委員にとどまり、それ以上の党の要職は与えられなかった。また、金正日総書記の妹婿で、金正恩氏の重要な後見役と目されてきた張成沢チャンソンタク国防委副委員長の常務委員会入りもなく、政治局員候補、中央軍事委員にとどまった。常務委員は、金正日総書記、金永南キムヨンナム最高人民会議常任委員長、崔永林チュヨンニム内閣総理、趙明禄チョミンロク国防委第一副委員長、李英浩リヨンホ総参謀長の5名であった。長らく病に伏している趙明禄第一副委員長が名を連ねたの途絶えている趙明禄第一副委員長が名を連ねたの

は意外であった。

権力者のいる機関に実権が移るのは世の常であり、金正恩氏が副委員長となった中央軍事委員の位相が高まるのは確実である。高齢の趙明禄第一副委員長が遠からず常務委員会から抜ける際、それらのポストに金正恩氏が就くことまで計算に入れた人事だった可能性も考えられる。

新指導部の主要メンバーを見ると、突出して若い金正恩氏を除き、ほとんどが高齢の、よく知られた幹部たちであった。今回公表された党の人事と国防委員会、最高人民会議常任委員長、内閣総理、さらに人民武力部長等の要職を総合的に勘案すると、絶対的首位である金正日総書記、および同じく金日成主席の血を継ぐ妹の金慶喜^{キムギョンヒ}党部長、事実上後継者としてデビューした金正恩氏は別格として、ナンバー2不在のバランス型人事が採られたと言える。防衛研究所の室岡鉄夫主任研究官は、これを「人事の妙」と称したが、言い得て妙である。これによって、最高権力者の身に緊急事態が生じたとしても、特定の幹部がリーダーシッ

プをとることなく、合議によって金正恩氏がより高い地位に祭り上げられる、いわば危機管理体制が整ったと言える。

論調分析の妥当性と限界

今年6月に党代表者会の招集が発表された後、『労働新聞』の論調は、「代を継いで伝統を輝かしていく」ことの重要性を強調しながら、「革命の継承」「金正日総書記の子孫」「万景台（注：金日成主席の生誕地とされる）家門」「白頭（注：金正日総書記の生誕地とされる）の血統」、「革命の第三世代」といった言い回しを多用して、後継者の登場を強くにおわせてきた。北朝鮮国内では、この『労働新聞』を読むことが義務化されている。だからこそ、特徴的な表現の出現やその増減は重要な分析素材となる。そのような顕著な論調の変化と、党代表者会がわざわざ44年ぶりに開かれるという事実を勘案すると、金正恩氏の公式化・公然化がその帰着点であることを展望することにそれほど大

きな困難は伴わなかった。

しかし、外部社会がさまざまな手段で情報を収集し、検証しても、いくつかの予期せぬ展開があったことは否めない。韓国メディアを中心としたさまざまな誤報も今後の教訓となろう。

まず、金正恩氏の名が初めて北朝鮮の公式メディアに出てきたのは、党代表者会そのものに関する報道ではなく、当日未明に発表された、朝鮮人民軍大将の称号を授与された、というニュースであった。曲がりなりに、選挙で「選出」されることが重視されていると考えられたばかりに、これには驚きであった。また、金正恩氏が就任する可能性のあるポストとして政治局常務委員が一つの焦点となってきたが、それは金正日氏が公式の場にデビューした30年前の前例に足を引っ張られ過ぎた分析であった。

さらに、当初予告されていた「9月上旬」になっても代表者会は開催されず、延期となってしまう理由について北朝鮮側は明らかにしていない。しかし、日韓メディアが報じたように、8月下旬

と9月初めに北朝鮮を襲った洪水被害が表面的な理由にされたことは『労働新聞』でも読みとれる。例えば、9月17日付の一面トップに「偉大な領導者金正日同志にシリア・アラブ共和国大統領が慰問電文を送ってきた」との記事が掲載されている。打電日は「8月23日」で、電文が送られてから3週間も経ってからという不自然な公表であった。それに先立って9月15日には、同月初めの台風で「数十人が死亡し、約8300世帯の住宅が破壊された」と報じられていた。

その後、党代表者会に関する『労働新聞』の論調は明らかにトーンダウンした。開催の意思は明確に示すものの、後継者の登場を示唆する特徴的な表現が全くといってよいほど見られなくなってしまうのである。その背景についても現時点で明確に説明することができない。

昨年4月には憲法が改正され、金正日総書記が委員長を務める国防委員会が強化されていた。その時点では、筆者自身も国防委員会を中心に後継体制を整備していくものと展望しており、201

0年に党代表者会を開催して中央軍事委に副委員長ポストを新設することなど想定外であった。

北朝鮮の内部は依然として不透明な部分が多いが、後継体制の整備については、当初のシナリオ通り、目標に向かって一直線に進んでいるように見受けられない。われわれが知り得ない要因も存在し、相当に試行錯誤しながら物事を進めてきた感がある。

「負の遺産」継承

今年初めから北朝鮮メディアは、10月を「大祝典場」にすると繰り返し返してきた。10月10日の党創建65周年をこの上なく重視してきたのである。また、党代表者会を「9月上旬」に招集すると発表した後は、両者を常にセットで報じてきた。

実際、金正日総書記の再推戴と金正恩氏登場を受け、予告通り祝賀ムードが演出されたと言える。10月10日夜には金父子出席のもと「大慶祝夜会」が平壤で開催された。同日午前0時には、金正日

総書記が金正恩氏や幹部を引き連れて「社会主義朝鮮の始祖であられ、朝鮮労働党の創建者であられ、民族の父であられる偉大な首領金日成同志が永生の姿でいらっしやる錦繡山記念宮殿」を訪問した。午前には、金日成広場で慶祝閱兵式と軍事パレードが開催されたが、朝鮮中央テレビは異例にも生中継でその模様を報じていた。

もちろんのこと、「大祝典場」となる理由が後継者のお披露目であるとは直接的に述べていないが、一連の行事は、事実上金正恩氏の登場を内外にアピールし、世襲を既成事実化する機会にもなった。また、『労働新聞』によれば、党創建65周年に際して破格の配給を図った模様である。

しかしその裏で、日韓メディアを中心に、3代世襲に対する北朝鮮の人々の不満の声も報じられている。中朝間の活発な人的往来に伴う口コミやDVDの流入によって国外の状況もある程度知れ渡っているのが現実だが、たとえ北朝鮮が情報統制社会にあるとしても、人間には比較する能力が備わっている。他国の情報という横軸に欠陥が

あったとしても、20年前、30年前の方がまだましだったという縦軸での比較は可能だということである。冷戦終結直後に金日成主席が死去したため、金正日総書記がトップになった時の北朝鮮は未曾有の食糧難に見舞われていた。北朝鮮の人々には、程度之差こそあれ金日成主席に対する欽慕きんぼの念があったと言うが、経済が最悪の状況にあった時期に台頭した金正日総書記に対しては不満ばかり募らせている。

今回は、不満を抑え込む暴力装置が機能しており、金正日総書記の指導力が誇示できるうちに、後継者の公式化を強行してきたと言える。3代世襲の意思表明は、長年の疲弊した経済に加え、国際社会の制裁、貨幣交換措置（デノミ）による混乱、哨戒艦沈没事件に伴う韓国との協力中断、さらに洪水被害の直後という状況の中で行われた。金正恩氏が父親から受け継ぐ「負の遺産」は計り知れず、「正統性」確保の上でも、その克服が大きな課題となる。

ちょうど30年前の10月、金正日氏は長年の矛盾

が露呈して経済が下降線をたどろうとしていた時期に公式化された。そして金日成主席の「負の遺産」を継いだ金正日総書記は、社会主義体制下における3代世襲の意思を国内外に闡明たんめいにした。金日成主席の血統を継いでいるという、自らの「正統性」を否定することになりかねない他の選択肢は、示されなかったのである。

磯崎敦仁
いそぎあつひと

慶應義塾大学商学部中退。
慶應義塾大学大学院、ソウル
大学大学院を経て、在中国日
本国大使館専門調査員、外務
省専門分析員歴任。現在、東
京大学非常勤講師を兼務。近
著に『北朝鮮入門』（東洋経
済新報社、2010年）がある。